

Oral History Workshop News

第24回例会

「浜の記憶を明日へ—浦安の聞き書き」

講師 林 奈都子 さん (浦安市郷土博物館学芸員)

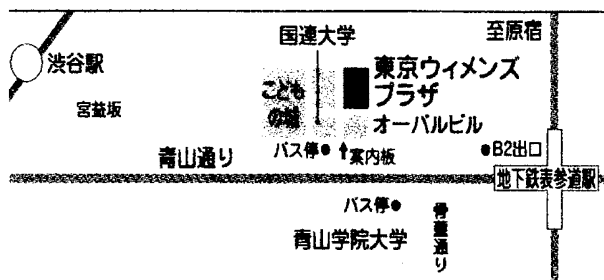
浦安は昨年の3. 11大震災で大きな被害をこうむりましたが、それに先立つ50年以上も前に、「浦安・黒い水事件」「本州製紙江戸川工場事件」などと呼ばれる大事件に遭遇しました。江戸川上流に位置する本州製紙から真っ黒な廃水が浦安の漁場に流れこみ、魚介類に大きな被害を与えました。浦安の漁民たちは再三・再四工場との交渉や集団抗議を行い、ときには乱闘事件も起こりました。町民大会や国会陳情などを重ね、全国の漁民の力を結集して、水質二法の制定をかちとりました。そしてその後浦安は…。

事件から50年後、市民による博物館ボランティア「浦安・聞き書き隊」が結成され、後世に伝えたいと聞き書きをはじめ、二冊の報告書となりました。

この事業に関わってこられた林さんにお話をうかがいます。是非ご参加ください。

記

日時 4月15日(日)
14:00~16:45
会場 東京ウィメンズプラザ
第1会議室 A
参加費 1000円
(会員500円)



- ・渋谷駅下車徒歩12分
- ・地下鉄銀座線、半蔵門線、千代田線:表参道下車徒歩7分
- ・都バス(渋88系統):渋谷駅からバスにて青山学院前下車


例会に先だって2012年度総会を行いますので、会員の方はご出席ください。

総会 13:15~13:45 事業報告、会計報告、事業計画、予算案、世話人選出

「なぜ日本人の僕が、先住民の声を聞き続けてきたのか」

慶応義塾大学名誉教授 清水 透

歴史学への素朴な疑問



歴史学とはじめて出会ったのは、1973年から3年間のメキシコ留学の時であった。当初、メキシコ現代史に関心があったが、そのためには19世紀史を知らなくては、いやいやその前の時代の歴史も見なくては・・・結局行き着いたテーマは、植民地時代のキリスト教の伝道と先住民社会との関係であった。文書館での古文書との格闘の日々がつづくなか、ふと疑問がわいてきた。文書の書き手は植民地の支配者や神父たちで、彼らに歯向かった被征服者の動きや、征服者の眼に映った彼らの姿の一部は見えてきても、先住民自身の声は一向に聞こえてこないのだ。征服された人々、「闘わなかった人々」も、彼らなりに過去を解釈し、その記憶に従って歴史の主体としてその時々を生きたはずではないか。僕の関心は徐々に、「闘わなかった人々」「普通に生きる人々」の聞こえてこない声に向かっていった。一時期接近したマルクス主義歴史学ですら、植民地支配下の搾取・抑圧の構造は見えてきても、「普通に生きる人々」の声はやはり聞こえてこない。思想の左右を問わず、文献のみに依拠する歴史学の限界性について、ますます確信を強めた。

ある決断

しかし、300年、400年前の人々の声を掘り起こすことは、どだい無理な話だ。それならいっそ諦めて、文書の世界で暗中模索をつづけるのか？いや、ちょっと待て。過去の人々の声が掘り起こせないとしても、今を生きる人々の声を糧に記録を積み重ねてゆけば、50年先、100年先には、歴史学の方法も大きく変わることになるはずだ。そんな思いの僕の背中を押してくれたのが、偶然出会った一冊の本『ファン・ペレス・ホローテ』であった。一人の先住民の男の過去から現在に至る足跡を、文化人類学者リカルド・ポサスが1940年代末に語りの形式でまとめた物語だが、そこには僕が求めていた生きた歴史があった。声なき声が語る、メキシコ現代史があった。

その本の主人公ファンの子供はまだどこかで生きているはず。まずはファンの生きたチャムーラ村へ出かけよう。1979年、すでにその時僕は36歳。社会調査の経験もなければ、文化人類学の素養もない。マヤ系の先住民社会についても、知識は皆無に等しかった。いや、むしろ先入観はないほうがいい。ひとりのただの他所者として、どこまで受け入れてもらえるのか。既存の研究論文は読ままい、言語も日本語で「おはよう！」からはじめればよい。それで受け入れてくれるなら、相手もひとりの人間として、本音を語ってくれるかもしれない。こうして僕の手探りのフィールドワークが始まった。それは、アカデミズムの王道からはずれた、アウトサイダーとしての道を自ら選ぶ決断であった。

先住民の村で考える

8 か月の村通いの末、運よくフアンの長男ロレンソと出会うこととなり、以来およそ 30 年にわたり、ロレンソ一家の聞き取りをつづけてきたが、その過程で突きつけられた問題、考えさせられた問題は数知れない。そのほんの一部を紹介するなら、まず第一に、30 年たっても僕は村の人々にとって「他者」でしかあり得ないということだ。名付け親を頼まれ、村長の就任式に付き人を依頼されたり、今では親戚同様に受け入れてもらってはいるが、時間感覚、価値観、歴史観の違いは埋めがたく、他所者の僕に、彼らの価値の世界をどこまで理解できるのかまだ自信がない。研究対象＝他者を分析する＜学知＞にも一定の意味は認めざるを得ない。しかし、分析によって他者は＜学知＞の都合に従ってある一定の枠組みにはめ込まれ、あるいは身体の一部を切り落とされる。それで他者を理解できたとするなら、それは＜学知＞の傲慢さ以外の何ものでもないようだ。

もうひとつは、立場と立ち位置との違いについてだ。果たして他所者の僕は、彼らの立場に立つことが可能だろうか？かつて第三世界の立場に立って、労働者の立場に立って・・・といった主張が歴史学のなかでも叫ばれた時代があった。しかし他者でしかありえない自分が、彼らの立場に立つことは、所詮不可能だ。その不可能性を十分自覚した上で、限りなく彼らの立場に寄り添える立ち位置を模索すること、そのことの重要性を痛感している。そのためには、ときに問う側から問われる側に立場を逆転してみると、きわめて分かりやすい。医師が患者になってみる。健常者が障害者になってみる。そうしてはじめて、異なる世界がそのものとして自分に突き刺さり、根拠のない優越意識からも解放される。相違に目覚めてはじめて、自分の価値の世界がいかに偏狭であったかに気づき、視野が一步、ふくらみを増してゆく喜びを自覚できる。

最後にもう一点。先住民の一家族というきわめてマイクロな世界とつきあって、どれほど普遍性のある問題が抽出できるか、といった批判についてだ。当然のことながら、安易な普遍化は意味をなさない。しかし、マイクロとの徹底的なつきあいに拘るなら、具体的な個を突きぬける普遍的問題にゆきつくことは大いにあり得ることだと信じている。ただ、歴史学が近代という時代の国家権力のための学問としてスタートした経緯を踏まえるなら、自ずから対象とされるマイクロは限定されてくるはずだ。近代という時代や文化・社会を主導した人々、権力を担ってきた人々は論外だろう。あらゆる意味で近代のゆきづまりに直面している今という時代の根源的な問題を抽出するためには、近代が生み出し無視しつづけた最果ての＜南＞に焦点を合わせることも不可欠ではないか。先住民でもいい、ホームレスでも下請けの原発労働者でも、病者でも障害者でもいい。そのいずれのマイクロからも普遍的な問題がいくらかも見えてくるはずだ。僕にとってオーラル・ヒストリーとは、そのようなものであってはじめて、存在理由があるように思う。

〈ご参考までに〉

リカルド・ポサス/清水透『コーラを聖なる水に変えた人々』1984年現代企画室。

清水透『エル・チチョンの怒り』1988年、東京大学出版会。

清水透他編『ラテンアメリカ出会いのかたち』2010年、慶応義塾大学出版会。

新刊紹介

大地に刻みたい五人の証言 渡部豊子編集（三弥井書店、2010年、2000円）

—戦争体験を聞くということ

渡部さんは1942年生まれ、山形県新庄市の数すくない伝承昔話の語り部です。

姉家督によって昔話を継承してきた安食才兵衛の家からとついできた祖母クニから昔話を聞いて育ち、味のある新庄弁で語っています。また今もふるさとに伝わる昔話を聞きあつめています。本書はそんな中で聞き取った五人の戦争体験をまとめたものです。満州からの帰還、ニューギニアからの生還、満州引揚げ、ロシアでの捕虜生活、広島での原爆死者のかたづけなどが、新庄で暮らす身近な人々によって語られています。長いこと胸に秘めて語られなかった重い体験が、渡部さんの新庄弁の問いかけによって、ぼつぼつと語られています。渡部さんはそれを、語られたままに起こしています。「これで今夜から、戦友の夢をみねぐなるな。聞いてもらってどっかど（肩の荷が下りた）した。供養なったな」といった新田小太郎さんと加藤喜一さんは亡くなり、他の三人のかたがたも80代、90代です。聞き取りのベテランである渡部さんの仕事が、ますます大事なものになっています。（生方孝子）

インフォメーション

第10回 JOHA（日本オーラル・ヒストリー学会）大会 名古屋で開催

2012年9月8日（土）～9日（日） 会場：名古屋・相山学園大学

2011年度 オーラル・ヒストリー総合研究会の動き

2011. 4. 9（土） 2011年度総会 13:00～13:30 出席者16名
第21回例会 13:30～16:30 文京シビックセンター B1学習室 参加者19名
『オーラル・ヒストリー 橋浦家の女性たち』をめぐって 報告；折井美耶子 生方孝子 宮崎黎子
コメンテーター； 重信幸彦さん 江刺昭子さん
2011. 5. 6（金） 第42回世話人会 13:30～16:00 東京ボランティア・市民活動センター（飯田橋）出席者4名
2011. 5. 16（月）「オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース」第19号（4P）発行
2011. 6. 11（土） 第22回例会 13:30～16:30 婦選会館 2F 会議室 参加者11名
「日本人としてのルーツを求めて：家族史とオーラル・ヒストリー」 報告；ニール・林さん 通訳：酒井順子
2011. 9. 26（月）「オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース」第20号（4P）発行
2011. 10. 18（火）第43回世話人会 13:30～15:30 東京ボランティア・市民活動センター（飯田橋）出席者3名
2011. 10. 30（日）第23回例会 13:30～16:30 文京シビックセンター 区民会議室 参加者19名
「なぜ日本人の僕が、先住民の声を聞き続けてきたのか」 講師；清水透さん
2011. 12. 6（火）第44回世話人会 13:30～16:40 東京ボランティア・市民活動センター（飯田橋）出席者4名
2012. 2. 21（火）第45回世話人会 13:30～16:40 東京ボランティア・市民活動センター（飯田橋）出席者3名
2012. 3. 8（木）「オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース」第21号（4P）発行

オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース No21

会員募集中！

連絡先 〒120-0025 東京都足立区千住東2-6-2

年会費 1000円

宮崎黎子 TEL 03-3882-8576

*会費未納の方、ご入金よろしくお願いたします。

振替 00170-6-296964

Oral History Workshop News

第25回例会

オーラル・ヒストリー・歴史と自己の再発見 IV

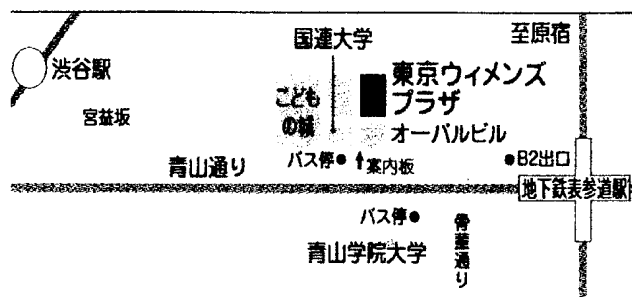
このシリーズが始まったのは、2006年。以後2007年、2008年と議論を重ねてまいりました。今回は4回目。3つの地域から報告していただきます。

それぞれの実践のなかで、感じた矛盾、新たな発見そしてこれからの課題について、語っていただきます。みなさまのご参加をお待ちいたしております。

記

- 日時 10月 7日 (日) 13:30~16:30
- 会場 東京ウィメンズプラザ2F 第1会議室 A
- 報告 ☆ やちよ聞き書きの会 『行商を担った女性たち—家族を支え、東京の食を支えてきた』(2012/9刊)
- ☆ 八王子女性史サークル 『八王子に生きる女たち 4—それぞれの社会参画』(2012/6刊)
- ☆ 千代田区女性史サークル 『時代を駆ける』第5号(2010/11刊)

コメンテーター 海保 洋子 折井美耶子



- ・渋谷駅下車徒歩12分
- ・地下鉄銀座線、半蔵門線、千代田線:表参道下車徒歩7分
- ・都バス(渋88系統):渋谷駅からバスにて青山学院前下車

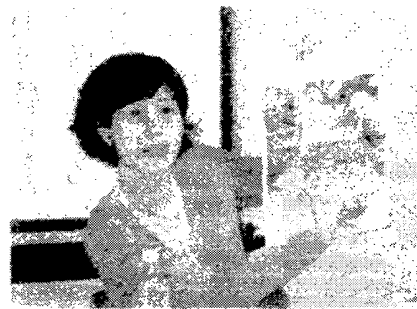
「浜の記憶を明日へー浦安の聞き書きー」

浦安市郷土博物館 主任学芸員 林 奈都子

浦安市郷土博物館では、漁業権放棄・埋め立てへのきっかけとなった「黒い水事件(本州製紙江戸川工場乱闘事件)からちょうど 50 年目にあたる平成 20 年度に、当時を知る方々を語り手に市民と一緒に聞き書きを始めようと思い立ち、博物館ボランティア「浦安・聞き書き隊」を発足させました。1 年間に 52 名の方々からの聞き書きを行い、その後 2 年間で原稿をまとめ、聞き書き報告書『ハマ記憶を明日へ』I・II を刊行しました。

浦安は、「海苔と貝のまち」と言われた漁師町でしたが、埋め立てによって面積は 4 倍に拡大し、人口は 10 倍に増加しました。今や、漁師町時代を知る世代は 70 代を超え、年々少なくなっている現状です。事件そのものについて聞くだけでなく、生い立ちから現在までのライフヒストリーを語ってもらい、一人ひとりの人生のなかから、戦後の浦安の歩みを見つめ直してみようとしたものです。

この活動を始めにあたって、私自身にはもう一つの動機がありました。これまで、かつての漁撈習俗や年中行事などそのときどきのテーマに応じて、元漁師の方々からの聞き取り調査を行ってきました。聞き取りでは、どの語り手の方々も、昔の記憶の糸をたぐり寄せ、次々にたくさんのお話をしてくださいます。その方にとって、大切な思い出の数々です。家族とのエピソードや友人たちとのやりとりなど、話はどんどん膨らみ、次第にテーマから脱線していくのが常でした。テーマからはずれた思い出話になると、私はいつも焦り始め、「また話がずれちゃった。困った、元の話に戻さなくちゃ!」と、真剣に耳を傾けようとはしませんでした。テープ起こしをするときも、原稿にまとめるときも、その方の個人的な話はバサッとすべて切り捨てて、必要な部分のみを文字化していく作業を続けていました。



博物館の開館から 6、7 年が経ち、博物館ボランティアとして毎日館に来てくださる元漁師の方々が、高齢のため次々とお亡くなりになる日が続きました。お通夜の席で、私は愕然とするのです。毎日のように顔を合わせていたにもかかわらず、その方のことを私は何一つ知らない。どんな漁業に従事していたのかは知っていても、その後どんなふうに転業し、博物館でボランティアをなさる前は何かをしていらした方なのか、どんなご家族と暮らしていらっしゃるのかなど、全く知らない自分にハッと気づきました。そして、これまでの自分の仕事を振り返り、「個人的なこととしてバサッと切り捨てていたことの方が、むしろ浦安の町にとっては大切なことだったのではないだろうか」という思いに苛まれるようになりました。

そんな悩みを抱えるなか、「黒い水事件 50 年目」というタイミングが重なりました。「一度、語り手の気持ちに寄り添う形で、すべての話に耳を傾け文字にする作業を市民と一緒にやってみよう」と思い、募集をかけて、この活動を始めました。

文字記録として残ることがない、体験者からの証言を収集・記録できたことで、全く

知られていなかった事実がたくさん浮かび上がってきました。これまで、事件は「町一丸となって、海を守るために闘った」と言われてきました。しかし、黒い水に気が付かなかった人、国会陳情へ行くことを知らなかった人、自分の漁に被害はなかった人、などの証言が出てくることによって、地域の中で武勇伝的に捉えられてきた事件の全体像を見直さざるを得なくなり、文献資料からだけの歴史研究がいかに不十分なものであるかを痛感しました。

しかしそれ以上に、今回の大きな成果は、聞き取りを重ねるプロセスのなかで、聞き手・語り手それぞれの郷土に対する意識が大きく変化していったことです。

「地元の歴史を知りたい」・「漁師町時代のことに興味がある」・「環境問題に関心がある」・「博物館ボランティアをやってみたい」などの動機で聞き手として集まった参加者でしたが、元漁師の方々からの話に、次第にいろいろな思いを抱くようになっていきました。ハマをあきらめざるを得なかった多くの人々の苦勞(犠牲)の上に、現在の便利で豊かな暮らしが成り立っていることや、一人ひとりの人生が町の歴史をつくってきたのだということに改めて気づくとともに、歴史を掘り起こして記録に残すだけではダメで、未来の浦安市民に対して恥ずかしくないまちづくりを今しておかなければいけないのではないか、という意見が出るようになりました。この活動で得た気づきをより多くの市民に伝え、さらに行動・実践へとつなげていくことが大切だと、未来からの視点で「現在」のことを考えるようにもなりました。

こうした意識の変化は、聞き手側だけでなく、語り手自身のなかでも起こっていきました。インタビューを受けて初めて、事件や漁業権放棄が自分の人生にとってどうだったのかということ考えた、これをきっかけに家族や友人ともそんな話をするようになった、などの声がいくつも寄せられました。

聞き書きプロセスのなかで、語り手・聞き手それぞれに起こった意識の変化は、「ディズニーランドだけじゃない、浦安の魅力」をより一層地域のなかに浮かび上がらせることになりました。「海とともに生きてきたことが、浦安のアイデンティティなのでは」と埋立地に住む新住民が、かつて「おらんハマ」と言われていた海を取り戻すにはどうしたらいいのだろうか、さらに考えるようになっていったと思います。

活動を始める当初、たまたま『まちづくりオーラルヒストリー』(水曜社、2005年)という本に出逢いました。歴史や社会学の分野ではなく、早稲田大学理工学部建築学科の後藤春彦研究室による取り組みがまとめられたものです。

後藤研究室では、全国各地から過疎化やその他の事情で元気がなくなってしまった町の活性化支援を依頼されるのですが、研究室の学生たちは初めに、その地域の人々から暮らしや人生についての聞き取りを行い、記憶のなかに眠っている地域資源を発掘する作業を行っていきます。聞き書きが進められるにつれて、語り手自身も自らの地域の価値に気づき始め、この集めた聞き書き情報をもとに、今度は地域住民が一緒になって、新聞・小冊子などの地域情報誌を作成したり、座談会や地元商店街のイベントを仕掛けたりして、まちの活性化をはかるという実践が行われていきます。研究室では、それら一連のプロセスを「まちづくりオーラルヒストリー」と定義づけ、この本が刊行されました。

浦安の聞き書きも、この「まちづくりオーラルヒストリー」を意識しながら行ってきたものではありましたが、まさに「語り手・聞き手」双方の相互作用によって、地域の歴史が編まれていく過程を通して、まちづくりへの意欲が市民の中に大きく育っていくダイナミズムを実感することができました。

震災による液状化によって、今、浦安市民の誰もが「これからのまちづくりをどうするのか?」と、真剣に考えるようになっていきます。まちづくりオーラルヒストリーが、これからどう活かされ、実践されていくのか。そうした機会と場を提供していくことも、地域博物館としての重要な役割であろうと思っています。

新刊紹介

『驚きの介護民俗学』 六車由実著 医学書院

(2012年3月5日刊 2100円)

老人ホームは民俗学の宝庫—といわれて、あっと気がつく人も多いと思う。そこにはたくさんのお年寄りが、それぞれの生の経験を持ち寄っているのだから。ただ著者も言うように介護の現場の厳しさは、とてもそうした人々からゆっくり話を聞く時間を許さない。

にもかかわらず大学で民俗学を教えていた著者は静岡県の特養老人ホーム内のデイサービスの介護職員として転職した。その理由は明らかにされていないが、「介護民俗学」という新たな分野を確立するためではなさそうだ。たまたま担当した人の話に付き合っているうちに、そのことに気がついたらしい。例えば、昭和24年、靴下のメリヤス編み機を製造販売する会社に就職したSさんは、農家の副業として、編み機を売り、メンテナンスもして歩く。全国を歩き、その家の主人と酒を飲み、機械を直し、新しい機械を売り込む仕事は、宮本常一の「忘れられた日本人」の博労の昭和版を思わせる。

昔話をききに村へ入ると、酒税役人をだまして当時密造酒だったドロクを妊婦の布団に隠した話や、狐にだまされた話の一つや二つは必ず出てくる。中には自分がだまされたと言う人にも出会う。とびきりの美人に誘われて、いい湯に入っていて、気が付いたら肥溜めの中だったと言う話を呑気に語る人は、いかにもだまされそうな人で、聞くほうも、その時間、ひとつの場を共有して、和やかになっていく。そういう人たちのいた時代をつくづく懐かしいと思う。そうか、そういう人たちは今は老人ホームへ行けば会えるのか、と思う。

「年をとるとは、それまでは見えなかったものが見えたり、聞こえなかったものが聞こえるようになることであり、そうして跋扈する狐や死者たちを拒絶せず、否定せず、彼らとともに腰を据えて生きていくことなのではないか」著者の言葉である。(生方孝子)

インフォメーション

第10回 女性史研究東京連絡会 (講演・講義・交流)

日時 2012年11月17日(土) 13:30~16:30

場所 練馬区男女参画センター3F会議室(西武池袋線石神井公園下車)

参加費 500円

講演 地域女性史の現状と課題

山村淑子

講義 近世・江戸から

一品川の漁師のおかみさんたち、奉行所に訴える 堤 洋子 桜井由幾

連絡先 野々村恵子(練馬女性史を拓く会) 042-492-9017

オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニューズ No22

会員募集中!

連絡先 〒120-0025 東京都足立区千住東2-6-2

年会費 1000円

宮崎黎子 TEL 03-3882-8576

*会費未納の方、ご入金よろしくお願いたします。

振替 00170-6-296964

Oral History Workshop News

第26回例会

「3. 11の衝撃 いのちと暮らしを問い直す
—東北の近現代史と聞き取りから—

講師 大門 正克 さん 横浜国立大学教授

3. 11東北大震災のあと、放射能汚染、地震・津波による被災、それらが引き起こした地域社会の崩壊に対して、歴史学は一体何をなすうるのか…。この問題を自らに問うてきた研究者たちが「歴史から築く『生存』の足場—東北の近代120年と災害・復興」というテーマで講座に取り組みました。企画から関わってこられた大門さんに、さらに岩手県和賀町の1950・60年代の「生存」への取り組みや、3. 11後の宮城県石巻市雄勝小学校での教育実践、聞き取りを通じて、1950・60年代における女性たちの取り組みの歴史的意味についても語っていただきます。2003年第4回例会以来、およそ10年ぶりに再び大門さんをお迎えします。みなさま、ふるってご参加ください。

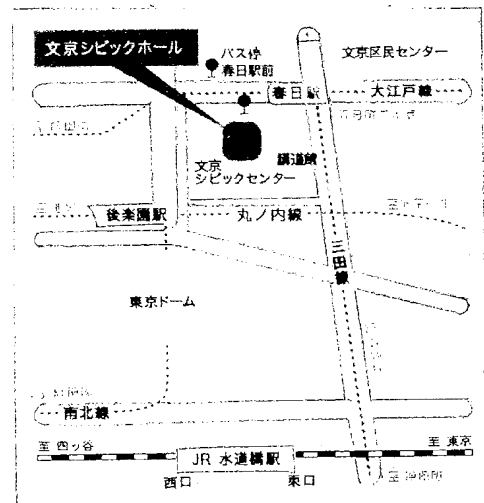
記

日時 4月 20日(土)
13:30~16:30

会場 文京シビックセンター
5F 区民会議室 A
(文京区春日1-16-21)

- ・東京メトロ丸の内線・南北線後楽園駅より徒歩1分
- ・地下鉄都営三田線・大江戸線春日駅より徒歩1分
- ・JR総武線水道橋駅より徒歩8分

参加費 1000円 (会員500円)
(協力; 文京の文化環境を活かす会)



例会に先だって2013年度総会を行いますので、会員の方はご出席ください。

13:00~13:25 事業報告、会計報告、事業計画、予算案、世話人選出

第25回例会報告 歴史と自己の再発見Ⅳ

『聞き書き 行商を担った女性たち—家族を支え、東京の食を支えてきた』をまとめて

やちよ聞き書きの会 八木 節子



右から八木、飯村、坪、戸川 各報告者

出版の経緯

○2006（平成18）年9月 やちよ聞き書きの会活動開始、会員5名。八千代市男女共同参画センターの登録団体として、毎月第4火曜日に活動。会員は同センターで2001、2002年に開催された女性学講座Ⅱ「八千代の女たち」の講座生として聞き書きを学ぶ。八千代市より刊行された『聞き書き八千代の女たち—激動の昭和を生きて いま—』（2004年刊行）編集に携わり聞き書きの重要性を認識する。

テーマを「京成電車に乗って行商を担った女性たち」とする。

聞き書き対象 『八千代の女たち』の話者とのつながりやセンターの手助けから探し出す。

○2008（平成20）年7月 聞き取りのまとめとして記録誌編集、八千代市男女共同参画社会づくり啓発事業補助金の報告とする。

○2012（平成24）年11月1日 『聞き書き 行商を担った女性たち—家族を支え、東京の食を支えてきた』を刊行。

・八千代市長、市内図書館、公民館、図書館、教育機関に寄贈。八千代市広報12月1日掲載、アサヒコム、北総読売、地域新聞に順次掲載し、女性史研究会、ワークショップ、歴史研究会に参加して1冊840円で頒布。

聞き書きの実践の中での自己の再発見

① 食物の流通のあり方

- ・朝採りの野菜を昼前に届ける産地直送の原点。生産者と消費者、顔の見える関係。
- ・昭和30年代から45年ころまでの最盛期には、地区世帯の7割が行商に行った。
- ・大正15年に八千代市の行商の拠点となった大和田駅ができ、関東大震災（大正12年）後、東京、横浜などへ青果物、鶏卵などの配給が途絶えたことや昭和13年の印旛沼の水害が行商を始めるきっかけとなった。

② 行商を支えた専用車両、東洋バスの存在

- ・東京から30キロ余に位置する八千代市から50キロ～80キロの野菜を籠で背負って行くために京成線は大きな役割を果たしていた。
- ・昭和23年 嵩高行商専用車両（3両編成）→昭和53年廃止通告に120人が国会陳情→平成10年西馬込行き廃止、現在普通上野行（大和田駅8時28分発の最後部一両が行商専用車両）のみ。平成24年大和田駅の荷物置き台撤去。（消え行くものを記録する重要性）
- ・昭和23年の東洋バス運行が始まる前は1時間かけて駅まで歩いたが、車が普及すると家族や地域の男性が行商を支えた。

◎明るく行商を語る女性たちに会うたびに、遅しく道を切り開く女性のパワーに圧倒され、自分の生き方を見つめなおす時間が持てた。

「聞き書き」とは何か―八王子女性史サークルの疑問と迷い―

八王子女性史サークル 坪 文子

八王子女性史サークルは、2007年6月に発足、以後5年間で、聞き書きを中心にした冊子・「八王子女性史に生きる女たち」を4冊刊行しています。

今回はまず、飯村美沙子が聞き書きを实践した感想を、聞き取りからの抜粋を交えて述べ、さらに今後の聞き書きに対する視点を、歴史的立場だけでなく、女性学の立場からも捉えてみるにはどのような聞き取りの手法があるのか探している旨を報告しました。

そして今、私たちは今まで行った40人余の聞き書きを再構成して、「本」を出そうと動き出しています。その際何に焦点をあてるか、何が大切かという共通理解を得るための話し合いの中で、聞き書きとは何か、どうあるべきかについての考え方の違いが明らかになってきました。今回はその疑問・迷いをこの会の皆様に提示し、何らかの方向性を見つけないかと参加しました。

〈誰に何を聞くか〉まず、話者の選択、誰に何を聞くかで3つに意見は分かれます。

① 聞き取りの対象者が何かを成し遂げた人でなければならないというのではなく、ごく普通に一生懸命に時代を生きてきた人の話を聞くことを大切にしたい。

聞き書きそのものに意義、満足感を感じ、聞き手の私たちが感動を得たこと、話者がまとめてもらったと喜んだことなどに喜びを感じます。聞き書きが目的化しています。

② 聞き書きを積み重ねていけば、一つは小さいけれど、歴史が形作られていくはず。

20回例会での清水先生のお考えに近いです。確かにミクロを積み重ねていけばとは思いますが。そのためにはたくさん事例を集めなければならない、でもそんなに時間がない。

③ 限られた時間の中で八王子の女性史を編むということになると、聞きたい人、聞きたいことを絞った聞き書きによって、八王子の女性たちの歴史を明らかにしていくことが大切。埋もれた歴史を明らかにしていくために、歴史の証言者としての話者から聞き書きしたい、聞き書きは一つの手法とも考えられます。しかし本当に聞き書きからどの程度の歴史が明らかにできるのか、確証は持ってません。新たな文字史料の発見で歴史が書きかえられるように、聞き書きも力を持てるのでしょうか。テーマを絞れば（例えば八王子では織物か）何らかの可能性は出て来るのかもしれませんが。聞き書きの前提としての歴史の学習、資料調査の必要性はもちろんですが。



課題を出し合って討論する参加者たち

〈どうまとめるか〉についても意見が分かれます。今まではその人の一生を聞き、まとめることを中心にやってきましたが、テーマを中心に話者を選び、聞き取りし、まとめるというやり方も試みています。ただしこれに対してはその人がどんな生い立ちであるか、青春時代をどう成長していったかを抜きにして、その人のやったこと、考えたことは語れないのではないか、との指摘があります。

〈これから〉今回、この報告に対し「そう固く考えずに、聞き書きはこうあるべきというものではないのだから」とのご意見をいただきました。依然、疑問は解決されていませんが、さらに迷いながら話し合いながら、柔軟に模索していかなければと思っています。

聞き書きのこれから―地域を越えての集約と分析の試みを

千代田区女性史サークル 戸川トモ子

千代田区女性史サークルとして、今まで活動してきた聞き書きの実践を通して、気づいたこと、課題、今後の活動への取り組みなどを明らかにできたらと思う。

サークル活動は12年を過ぎたが、振り返ると、当初は話者の話を聞き取り、テープ起こしをして、推敲を重ねながらまとめるという一連の作業だけに必死であった。それから年数を経て、少しずつ変わってきた部分もある。

当サークル研究誌『時代を駆ける』第1号は2002年の発刊で、12編の聞き書きを載せている。第2号は6編、第3号は8編、第4号は6編、最新の第5号は2010年の発行で、1編のみの掲載である。メンバー人数の減少、メンバー自身や家族の状況変化、その時のテーマや関心事項、まとめるまでの時間などに伴い、聞き書きの本数が変わってきている。

現在、課題として考えられることは、地域女性史で何をしたいのか、目的意識をはっきりさせなければならぬということである。曖昧なままだと、話者個人のライフ・ストーリーになってしまいがちである。それを避けるために、地域の歴史を知ったうえで、女性ゆえにどう生きてきたのかという視点から聞き取れることを常に意識すべきだと、気づかされた。千代田区域では、まとまった形態ではないが、記事や資料は残っていることが多いようだ。地域に関連した新聞記事や雑誌、タウン誌などの資料を発掘、調査して、照らし合わせてみることも怠ってはならない。

さらに近年、近現代史関連の書籍が豊富に出版され、映像も多く出まわってきている。女性たちの手によるものも多くなってきた。今までの歴史においては、女性に関する資料が少なかったため、聞き取りで得た資料は地域の女性に関する歴史叙述を補う意味で貴重であった。しかし、こういう状況では、聞き取りの資料的価値と豊富になってきた文字資料との取り扱い方など、ますます課題が増えてきた。

ところで、これまで集積されてきた各地域女性史の聞き書きは、通史に反映されているものもあるが、歴史的価値のある資料として扱っている地域はまだ少ない。各地域の女性の生身の姿をとらえている個々の聞き書きを数編でも集約し、分析してみると、その地域の女性たちの時代性の傾向がみえてくるのではないだろうか。個別の歴史を集約することにより、従来の歴史のなかに、女性の生きてきた証を新たな1ページとして加えることになるのではないだろうか。

今後の活動として、少人数のメンバーで聞き書きの課題を考慮しつつ実践することが、かなり困難になってきていることを感ぜずにはいられない。だが、前項の聞き書きの集約、分析を試みることはできるのではないだろうか。同様に、各地域の女性史の研究会や、さらにこのオーラル・ヒストリー総合研究会でも、組織の利点を生かして、各地域で分析したものを、規模を拡大して、集約、分析することが可能なのではないかと、期待される。

最後になるが、聞き取りのテープ、テープ起こし原稿などのアーカイブズ(記録保管所)の管理と維持が長年の懸案としてある。テープの劣化、費用、活用方法、話者の許可などの問題も付随する。テープや原稿などはできるなら公的機関での保存管理が理想である。

歴史と自己の再発見 IV コメンテーターから

「聞き書きは知的財産の発掘」

海保 洋子（総合女性史研究会）

第25回例会にて、①やちよ聞き書きの会、②八王子女性史サークル、③千代田区女性史サークルからそれぞれ聞き書きならでは大変参考になる貴重な報告があった。

①『聞き書き 行商を担った女性たち—家族を支え東京の食を支えてきた』（2012年11月刊行）は、農家の主婦労働が自家製の野菜等の東京方面への行商という、流通を先取りしたテーマである。それも関東大震災直後から平成まで、女三代にわたって継続され、この度聞き書き資料が文字化されたことは嬉しい限りである。その前提には、鉄道の開通があり、女たちの行商専用車両の獲得で、既得権として認知されたことがある。流通と現金収入として家計を支えた女たちの長年の行商の歴史が自治体史の上に反映されるであろう。重労働に堪えた女たちの健康状態のデータも是非載せて欲しい。

②からは、地域女性史とオーラル・ヒストリーと題して、女性史にとって「聞き書き」とは何かを6点示された。どれも当たっており、皆迷いながらやっていてこれが正解というものはないと思う。型にはめる必要は毛頭ないであろうし、話者にとって大切と思うことと、聞き手にとっての重要さの違いがむしろ聞き書きの醍醐味ではなかろうか。ライフ・ヒストリーもよし、その内の部分を取り出してもよし、目的が明確でありさえすれば良いのではなかろうか。

③からは、これからの聞き取りのこととして、文字資料も豊富で、本人自身の執筆資料もあるのに、何を聞き取るのかといった疑問が投げかけられた。なるほどであるが、「自伝」等はあくまで本人の視点で語ったものであり、客観的要素を入れることによって、異なる視点の発見や歴史を見直す糸口が見つかるのではなかろうか。

聞き書きは、女性の埋もれた歴史を地域の言葉で綴る知的財産の発掘ではなかろうか。

「日本の歴史を変える力に」

折井美耶子

「歴史と自己の再発見」というタイトルでの例会は、4回目になります。このタイトルにこめた意味は、聞き書きをするなかで改めて歴史とは何かを考え、また自分の生き方を問い直すひとつのきっかけになればということでした。

聞き書きは入るのに敷居は低いのですが、奥はとても深くこれで十分ということはありません。何十年と生きてきた人を、数時間で聞き取るだけでわかろうというのが本来至難の業ですし、聞き手の謙虚な姿勢が必要です。ジェンダーの視点がないとか、歴史の勉強が足りないとかは、聞き書きをするなかで努力し身につけていくことです。聞き書きには、こうでなくてはいけないという形はないと思います。みんなで協力してやっていく中で、自分たちの方法・スタイルもできてくるのではないのでしょうか。また八千代のようにひとつのテーマで取り組むことも大切です。従来の歴史に登場しない暮らしを支えた庶民たちを明らかにする、生活に根ざした聞き書きは重要だと考えます。

地域の女性史では、何かを成し遂げた人だけでなく、普通の暮らしをした人も同じ扱いで登場することに意味があり、歴史はエライ人だけが作ったわけではなく、大勢の庶民が支えたことを歴史に反映させることが必要です。近年の女性史や女性問題の中で、「個人的なことは政治的なこと」という意識を持つようになったのは、大事なことです。

また戦後六十数年たった今こそ、戦後の女性たちの動きを聞き書きしておかないと手遅れになるのでは考えます。そして皆さんが取り組んだ聞き書きを、どう地域に普及するか、学校に出前講座などするとか、立体的に伝えることも考えて欲しいと思います。そして地域史（自治体史など）に確実に反映させるように主張してください。聞き書きのアーカイブ化をどうするかは、データ化するにも場所やその運営にも膨大なお金と人手が要りますので、何とかしたいと思っているのですが皆さんで知恵を出し合いませんか。

聞き書きや地域の女性史の集積が、やがて地域史を変え日本の歴史を変える力になっていくことをひそかに確信しています。

＊ 追悼:奥田暁子さん ＊



近現代女性史、ジェンダー論の研究者、翻訳家として多くの業績を残された奥田暁さんが、昨年12月16日、肺がんのためお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

お病気がわかってから2年半弱、治療の方針や病院など、すべてをご自分で決められ病氣と闘い、最期はホスピスで衆院選の期日前投票をすませ逝かれたとのこと。ホスピスに入院される前に、ご自分の亡きあとにすべきことをお子さま方に詳細に書き残していかれたそうです。何ごとに対しても真摯にとりくまれるお人柄、そして、さりげない優しさにあふれた方でした。

個人的なお話はあまりなさらず、研究ひとすじの方でしたので、下関市で生まれられたこと、ご両親のこと、お子さまのことなどがえたのはごく最近のことです。

70年代、「北九州で子育てと主婦業に専念し、つきあう人は 社宅の主婦だけ」という生活、「そんな息苦しさから自らを解放したいという思いに突き動かされ」、「女性の解放」とはなにかを意識し始めたとのことです。（『Oral History Workshop News』N015 「私の1冊」）

遅まきながら…とおっしゃっておられました。それからほんの数年後には『女性解放の政治学』（ジョー・フリーマン著 未来社 1978年）の共訳書をまとめられました。また、フェミニストの視点で、キリスト教など宗教の持つ教義や制度の不合理を批判するフェミニズム神学の立場から書かれた『女性解放とキリスト教』（C・クライスト著 新教出版 1982年）や『性と宗教』（ケビン・ハリス著 コンパニオン出版 1985年）など数々の翻訳書を紹介、フェミニズムと宗教と女性史の関わりを研究する第一人者として貴重な方でした。

近現代女性史の研究では海外の学説にも目を遣りながら『女と男の時空』（藤原書店 1995～2000）のシリーズの編集・執筆を手掛けられ、「ジェンダーの次元を取り入れた女と男の関係の歴史」を提起されました。

闘病中も精力的に研鑽をつづけられ、2011年7月には『占領期の日本—ある米軍憲兵隊員の証言』（テレーズ・スヴォボダ著 ひろしま女性学研究所）を翻訳出版、さらに、昨2012年10月には『希望の倫理—自立とつながりを求めて』（共編著 知泉書館）を上梓されました。そのなかで、大震災と原発事故を通して見えてきた不合理な社会のあり方や既成観念を批判し、未来への提言として集団同調主義からの脱却を提言されています。望ましい社会を構築する指標として、私たちに託されたメッセージとして受け止めていかなくてはと切に思います。（山辺恵巳子）

私の1冊 東京電力福島第一原発事故で「村」の生活を奪われた村民の記録

『飯館村は負けない—土と人の未来のために』千葉悦子・松野光伸著 岩波新書 2012年

山村 淑子

阿武隈山系の内陸部に位置する福島県相馬郡飯館村は、人口6588人の小さな村である。その飯館村で、2011年1月29日・30日に「小規模自治体の可能性を探る in いたて」が開催された。東日本大震災の1ヶ月半前のことである。主催は福島大学小規模自治体研究所。本書の著者である福島大学教員の千葉悦子(社会教育学、農村女性・家族論専攻)と、松野光伸(行政学・地方自治論専攻)も、1990年より飯館村の「自立」と「協働」の村づくりの現場で、村民とともにその歩みを重ねてきた研究者である。

飯館村村民は、2004年に政府が打ち出した平成の市町村合併に対し、「自立が最善の道」と主張した菅野典雄を村長に選んだ。村は20の行政区分に分けられ、専門部会(25)を設けて村民参加の村づくりを進めた。特に、村政の担い手となる女性を育成し(若妻の翼)、女性13人が専門部会の一員となり、全ての部会に研究者も加わったのが特徴である。村民が発案し、村が掲げた目標が、「自立した『まidea』な村づくり」(真手=丁寧)である。

3月11日の大震災当日、村民の人的被害は、死者1人、軽傷者1人だった。だが、水道管破裂で水道は断水し、全村停電で固定電話は使えず、携帯電話も不通となって、ガソリン補給も絶たれた。その飯館村に、南相馬市や周辺市町村から避難民が押し寄せる。村は1200人分のおにぎりを用意した。その最中、福島第1原発で非常用炉心冷却装置への注水が不可能となり、翌12日に1号機が爆発した。13日に一部電気が普及すると、テレビを見ていた避難民から「原発が大変なことになっている」ことが村の職員に伝えられている。翌14日には3号機が水素爆発。村外からの避難者はあつという間に村を去った。この日、村に放射線測定機が設置される。翌15日には2号機が爆発。原発から40キロ離れた飯館村の放射線モニタリングの数値が一挙に上昇。「国が大丈夫だといっているんだから大丈夫」という職員。「これは異常事態です。少なくとも子どもを逃がさなきゃダメです」と警告する職員。それでも「大丈夫」の声。20日には水道水の高濃度ヨウ素汚染が発覚。23日には土壌から高濃度放射性セシウムが測定された。推移を見守っていた村民は母と子を逃がす。村は「村の存続」にこだわったため、区長会ではその村の姿勢に批判的な発言が相次いだ。

4月22日、政府が一転して、飯館村を計画的避難地域に指定。全村避難の指示を出す。後発の避難となった村は、区毎の避難先が確保ができず、三世代家族は世帯分離を余儀なくされた。26日の村民決起集会では「手作りだしあげてきたのに、この村を放射能で汚されてしまうと思うと、悔しくて悔しくて」「東北人は穏やかだから」そんなこと言われてられませんよ、穏やかじゃないんです。抑えているんです」の声があがった。数世代にわたって土を起し、家畜を飼って豊穡な大地に作り変えてきた故郷を「やすやすと後にすることはできない」と村に残る者や、村民の将来の健康を考え「健康手帳」を作成することを村に提案し実現させた若者の姿も在る。村の存立と村民の生存をかけて、「国家と村」、「村と村民」がせめぎ合う姿がリアルに記録され本書自体が飯館村の語り部となっている。

2012年度 オーラル・ヒストリー総合研究会の動き

2012. 4. 15 (土) 2012年度総会 13:15~13:45 出席者16名
第24回例会 14:00~16:45 東京ウィメンズプラザ 第1会議室A 参加者18名
「浜の記憶を明日へ—浦安の聞き書き」報告; 林 奈都子さん (浦安市郷土博物館学芸員)
2012. 07. 17 (火) 第46回世話人会 13:30~15:30 東京ボランティア・市民活動センター
出席者3名 ・第25回例会について ・ワークショップニュース内容
について
2012. 8. 28 (火) 第47回世話人会 13:30~16:30 東京ボランティア・市民活動センター
出席者4名 ・第25回例会の準備、役割分担・ワークショップニュース
の編集と印刷・発行日程
2012. 9. 7 (金) 「オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース」第22号 (4P) 発行
2012. 10. 7 (土)
第25回例会 13:30~16:30 文京区民センター3F 3D会議室 参加者32名
「オーラル・ヒストリー・歴史と自己の再発見 IV」
報告; やちよ聞き書きの会 八木節子さん
八王子女性史サークル 坪 文子さん 飯村美沙子さん
千代田区女性史サークル 戸川トモ子さん
2012. 11. 21 (水) 第48回世話人会 13:30~16:30
東京ボランティア・市民活動センター 出席者4名
・第25回例会反省 ・第26回例会の方針を決める
・ワークショップニュース 23号の原稿依頼について
2013. 1. 30 (水) 第49回世話人会 13:30~16:30
東京ボランティア・市民活動センター (飯田橋) 出席者4名
・第26回例会の準備と役割分担 ・第11回総会の提示内容について
・年間計画について ・ニューズレター印刷の日程
2013. 3. 12 (火) 「オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース」第23号 (8P) 発行
2013. 3. 12 (火) 午後 拡大世話人会

オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース No23

会員募集中!

連絡先 〒120-0025 東京都足立区千住東2-6-2

年会費 1000円

宮崎黎子 TEL 03-3882-8576

*会費未納の方、ご入金よろしく

振替 加入者名; オーラル・ヒストリー総合研究会

お願いいたします。

口座 No; 00170-6-296964

3. 11 の衝撃 いのちと暮らしを問い直す

——東北の近現代史と聞き取りから——

横浜国立大学教授 大門 正克

10年ぶりにオーラル・ヒストリー総合研究会で報告をさせていただいた。以前は、2003年11月、「聞きえなかった声」、そして聞こえてきた声——農村女性の聞き取りから」のタイトルの報告だった（のちに、大門「聞こえてきた声、そして『聞きえなかった声』——ある農村女性の聞き取りから」『歴史評論』第648号、2004年、として掲載）。私にとって忘れられない、聞き取りの失敗例の報告であり、私の聞き取りの転機になる報告だった。それから10年、今回の報告は、3.11後の私の取り組みについて話すとともに、この10年を振り返るものでもあった。

3.11後の2012年に、私は東北の近現代史を研究している友人たちと朝日カルチャーセンターで2回の講座を開催した。「生存」の歴史を掘り起こす——東北から問う近代120年」（新宿講座、4～6月）と「歴史から築く「生存」の足場——東北の近代120年と災害・復興」（気仙沼フォーラム、8月）である。とくに気仙沼フォーラムでは、全国、東北、私たち関係者を含めて80名弱の人たちが集まり、1泊2日で私たち報告者と現地の方々とのコメント、参加者の質問による濃密な時間がつくられた。



東日本大震災が起きたとき、私は『Jr.日本の歴史7 国際社会と日本』（小学館、2011年4月23日刊）の校正中であつた。日本の戦後史を子ども向けに書く本のなかで、私は戦後の子どもたちの作文をたくさん引用した。そのなかで、陸前高田市広田小学校の5年生2人が、1970年代に同地域でおきた地域開発について書いた作文があつた。震災後、私は2人のことが気にかかるようになり、2011年8月には、陸前高田にボランティアとして出かけた。瓦礫の後片付けをするなかで2人の作文が思い起され、歴史学に何ができるかを考えるようになり、そこから朝日カルチャーセンターの開催に至ることになった。

朝日カルチャーセンターの取り組みのなかで、私は、2003年から調査を続けてきた岩手県北上市和賀町にあらためて向き合い、和賀町の1950年代から60年代前半の取り組みと震災復興後の取り組みを重ねて考えるようになった。3.11の現在と応答しながら歴史学の存在意義を考え続けること、岩手県和賀町にあらためて向き合うこと、オーラル・ヒストリー総合研究会では、この2年間に考えてきたことを話すとともに、聞き取りについても言及した。

最初に、1950～60年代前半の和賀町で取り組まれた医療保健と生活記録、生活改良について話した。1950～60年代前半の和賀町では、医療・保健の取組み、生活改良、生活記録の運動が盛んだつた。和賀町では、農村の女性たちが医療保健問題に取り組み、生活改良や生活記録のグループをつくり、暮らしの足もとから「生存」のつながりをつくりかえようとした。対応するように、和賀町役場は地域医療と保健、社会教育と生活記録で積極的な取組みを行い、戦後地方自治の可能性を示そうとした。和賀町では、1950～60年代前半に新しい「生存の仕組み」がつくられたのであり、その歴史的意味について述べた。

和賀町でみられた「生存の仕組み」をつくる試みの歴史的意味の第1は、地方自治の本旨の実現をめざしたことであり、和賀町では、女性たちの運動が住民自治を強固に支え、それをもとに和賀町は医療保健と社会教育で団体自治を強めたと評価できること、岩手県でも医療保健と生活記録の分野で地方自治の本旨が追求されたことを指摘できる。第2は、「生存」の仕組みの内容についてであり、当該期の和賀町では、女性と子どもの「いのち」を守り、労働と生活（いのち）のバランスをとる「生存の仕組み」が追求された。この過程を通じて、強いふるまいに従う同調的参加から自主性にもとづく参加への大きな転換がみられ、家族関係についても大きな地殻変動がみられたことも特筆に値しよう。第3に、「生存」をめぐるダイナミズムがあらわれたことであり、運動の過程で葛藤やズレ、批判があらわれ、それを乗り越えようとする動きもまたあらわれたように、運動の求心力と遠心力の両方があらわれた。この求心力と遠心力のなかに、地方自治の本旨、地方自治・行政と運動、戦後復興から高度成長への転換点、家族関係の再編といった、「生存」をめぐる構造と主体の諸関係が反映している。

報告では、「聞き取りと文字史料——高橋フサの生活実践と生活記録」として、聞き取りについてもふれた。私の聞き取りは、1970年代末からテーマについて聞くことを始め、1980年代の途中からは、ライフヒストリーを聞くという方法に推移し、この方法で比較的長く聞き取りを続けた。この方法に大きな転機がきたのが、冒頭に紹介した聞き取りの失敗だった。1997年に山梨県の農家の女性に聞き取りをした際に、途中から沈黙が続くようになり、思うように聞くことができずに聞き取りをやめたことがあった。それまで比較的によく話を聞くことができていると思っていただけに、私には大きなショックだった。ライフヒストリーを聞くという方法が女性に合わなかったのではないか、私が男性だったこともマイナスに作用したのではないかなどと考え、2003年のオーラル・ヒストリー総合研究会で報告させていただいた。

ちょうどそのころから和賀町を訪ね、高齢の女性たちの話を聞くようになった。そこで私は、もっぱら耳を傾けることにつとめ、尋ねるといふよりも聞くことに専念するようになった。そこから聞くことには固有の意味があるのではないかと考えるようになった（大門「オーラル・ヒストリーの実践と同時代史研究への挑戦——吉沢南の仕事を手がかりに」法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』第589号、2007年）。

和賀町に出かけたときには必ず寄せていただく方が数名いた。そのなかに高橋フサさんがいた。静かな話し方のなかに、婿を勝手に決めてきた祖父の話、若くして亡くなった妹の話、勤労働員の話など、時折、強い思いを感じることもあった。私は、聞き取りと文字史料を重ね合わせ、高橋フサさんの戦時から戦後に至る生活実践と生活記録について考えることになった。先に述べた、和賀町の「生存の仕組み」の含まれた特徴である、強いふるまいに従う同調的参加から自主性にもとづく参加への転換と家族関係の地殻変動の評価は、いずれも高橋フサさんの聞き取りと文字史料の考察が大きな基礎になったものだった。

報告の最後で、「生存」の歴史を掘り起こすことは、震災後の復興を足もとから考えるための道すじに通じるはずであり、地域に眠る「生存」の歴史を掘り起こすことが、震災に向き合う歴史学の役割ではないか、と述べた。この考えを深めるうえで、聞き取りは私にとって欠かせない歴史実践である。聞き取りを含めた歴史研究を今後も続けたいと思っている。

「10周年記念誌」への原稿募集

折井美耶子

オーラル・ヒストリー総合研究会が、2003年1月31日に発会式と第1回例会として、中野卓さんの講演会を行ってから10年が経過しました。この会はその前年10月イギリスのポール・トンプソンさんを迎えて開かれる予定でしたが、急な来日延期のため集まった人々によって話し合いの結果、会の結成が提案されたのが始まりでした。

以来10年、今年3月の大門正克さんによる第26回例会まで、講師を招いての講演会やそれぞれの経験を話し合う「オーラル・ヒストリー：歴史と自己の再発見」などの例会を重ねてまいりました。また、初期には、<ジェンダー・戦争・記憶>というテーマでの共同研究あるいは個人研究の試みも企画いたしました。そのなかで、それぞれの会員がそれぞれの形で、これまでオーラル・ヒストリーに取り組んでこられたと思います。

会のニュース「Oral History Workshop News」もこの3月で23号を数えることになり、まもなく25号発行となります。そのなかには例会の記録などとともに「私の1冊」としてオーラル・ヒストリー（聞き書き）関係の書籍紹介などもあり、会の歴史として貴重な記録となっています。

会の記録を残すためにも25号までを復刻・合本とし、さらに会員の皆さんからの原稿を載せた『10周年記念誌』（仮称）を編みたいと考えております。皆さんの積極的なご応募を期待しております。以下の要領でよろしく願いいたします。

*テーマ：「10年を振り返って」「私のオーラル・ヒストリー」などオーラル・ヒストリーあるいは聞き書きに関する事など。

*字 数： 一人A4判で1頁もしくは2頁（1頁 40字×40行＝1600字、2頁 3200字）
1頁の方も2頁の方も、それぞれちょうどにおさまるようにお願いします。

*縮 切： 2013年12月末日

*送付先・問合せ先： 宮崎黎子 e-mail: miyazaki.reiko@beige.plala.or.jp

メールにより、添付ファイルでお送りください。

ご応募を今からお待ちしております！！

オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース No24

会員募集中！

連絡先 〒120-0025 東京都足立区千住東2-6-2

年会費 1000円

宮崎黎子 ☎ 03-3882-8576

*会費未納の方、ご入金よろしく

振替 加入者名；オーラル・ヒストリー総合研究会

お願いいたします。

口座 No；00170-6-296964

Oral History Workshop News

第28回例会

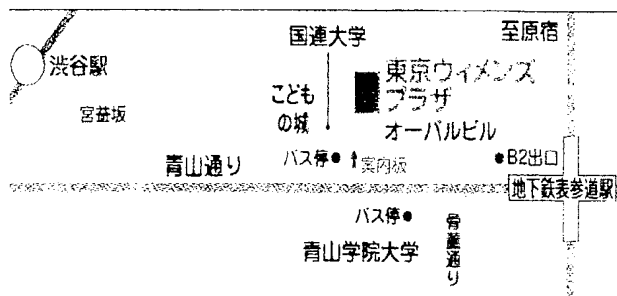
オーラル・ヒストリー・歴史と自己の再発見 V

このシリーズが始まったのは、2006年でした。それ以後2007年、2008年、2012年と議論を重ね、今回は5回目となります。各地域で、着実に実践が積み重ねられてきました。聞き書きを行い、考え、感じることは、自分自身と歴史との対話でもあります。

そのなかで、感じた矛盾、新たな発見そしてこれからの課題について、さまざまに語っていただきます。みなさまのご参加をお待ちいたしております。

記

- 日時 4月13日(日) 13:30~16:30
 会場 東京ウィメンズプラザ 2F 第1会議室A
 報告者 ☆ 梅村 貞子 (栃木市女性史研究会「あいの会」)
 ☆ 高橋 サイ (小山市女性史研究会)
 ☆ 木下 伸子 (西東京市女性史研究会)
 参加費 1000円 (会員 500円)



- ・ 渋谷駅下車徒歩 12分
- ・ 地下鉄銀座線、半蔵門線、千代田線:表参道下車徒歩 7分
- ・ 都バス(波 88 系統): 渋谷駅からバスにて青山学院前下車

例会に先だって2014年度総会を行いますので、会員の方はご出席ください。

13:00~13:25 事業報告、会計報告、事業計画、予算案、世話人選出

亡くなった人と共生する聞き取り—市川房枝を軸に

伊藤 康子（市川房枝研究会）

I. 市川房枝研究会聞き取り活動の概要

2005 年発足した市川房枝研究会は、2012 年までに 40 人の話を聞き、記録を『女性展望』2008 年 5 月号～2013 年 4 月号に断続的に発表してきた。研究会で聞きたい人を出しあい、市川房枝記念会（のち市川房枝記念会女性と政治センターと改称、以下記念会と略記）を通して日程調整、聞きたいことを十数項目くらい事前に渡し、婦選会館で約 2 時間 7 人前後で話を聞き、ビデオをとった。テープ起こし後、担当者が約 3500 字に原稿化、タイトルを提案、話し手に見ていただき、校正も双方で行った。熱心に話していただいた方々に心から感謝している。



II. 話し手について

① 個人的な関係が深い方、② GHQ 関係者、③ 議員・官僚、④ 活動を共にした方、⑤ 研究者・ジャーナリスト、⑥ 婦選獲得同盟・記念会関係者、議員秘書など。

生活も思想・信条も多様な方たちだが、市川が女性の政治的権利獲得・確立、差別からの解放のために一生働き続けたこと、私欲の無い清潔な政治家だったことは、一致して評価している。

III. 文献資料はあっても聞き取りをする意味

市川に関する文献資料は多く、著作、『市川房枝集』全 8 巻・別巻、記念会出版部による記録などがある。市川房枝研究会としても、『市川房枝の言説と活動 年表で検証する公職追放 1937 - 1950』、『市川房枝の言説と活動 年表でたどる婦人参政権運動 1893 - 1936』（記念会、2008、2013）、『平和なくして平等なく 平等なくして平和なし 写真集市川房枝』（ドメス出版 2013）の編集に全力で当たってきた。市川にかかわる文献は、国会図書館の簡易検索で見ることができる。

資料として最もよく使われるのは、『市川房枝自伝 戦前編』だが、その執筆姿勢を市川は「あとがき」で、「できるだけ正直に、いやなことでもかくさずに書く」「事実の後に感想や批判をちよっぴり書く」、自分の活動は婦人運動史でもあるので、記録や仲間の名前、背景にある社会の動向を自分の行動と共に書き残す、と書いている。また「ほとんど私生活がない」生活状態でもあった。

こうして、関心が薄い側面を市川自身は記録しなかった。婦人運動・市民運動をどう成功させるか、が関心の中心だから、どのような方法で成功に近づくかはその時考えたり話した、または自分の基準にのっとって行動したとしても、意識的に総括・記録していなかったように思える。市川の意識の外にあった部分を再現する方法としての聞き取りが必要なのではないか。

IV. 聞き取りから把握される市川房枝の生活スタイル

① 心配りの人、義理人情・友情に篤い、②毅然としている、愚痴をこぼさない、我が強い、理性的、忍耐強い、③気さくな人、威張らない、自然体、かたくなでない、④誠実、正義感、言行一致、公平、⑤実践の人、行動の人。

一見中性っぽく（男性風）、政治的主張を貫くので「怖い人」と見られたが、つきあっていけばやさしい人。

V. 公職追放について

市川が結局公職追放になったことについて、当時ウィードや日本人女性がかかわっていたのではないかの風評があった。しかしGHQスタッフは、アメリカの仕事の仕方として、担当外のことには口を出さないので、担当外だったウィードが関係できたはずがない、またウィードは市川に敬意を持っていたのではないかと思っている。他方市川関係者は、GHQに近づく姿勢を持たない市川が好まれないと思っていたようだ。「年表 1893 - 1936」の資料参照。

VI. 市川の力量が発揮された場について（順不同）

① 美濃部都知事当選、②労働省婦人少年局存続、③国際舞台に女性でよう推薦、国際的調査活動、④賞金などを運動発展のために寄贈、⑤早期に差別撤廃条約政府署名を迫る、⑥理想選挙の継続・普及、女性議員の増加、⑦金権政治・金権選挙・定数是正の追及、⑧家庭科男女共修や金大中事件など政治的課題を世論に訴える、⑨「男女平等」の課題を連帯の力で進展させる、⑩メディアの協力で民主政治確立に努力、⑪護憲・平和の訴えなど。

VII. 伝えたい市川のことば・行動

金銭関係はきれいに、男女関係は潔癖に、何でも話せる女友達は必要などなど。

『女性展望』の記録から読み取ってほしい。

VIII. 社会運動の方法

多様な立場・思想信条・生活の個人・団体をまとめるのは市川でなければできなかつたと評価されている。そうできたのは、私心がない、信念を貫く、包容力が大きい、人の評価的なことは言わない、実行力がある人だったから。最初の議員秘書だった紀平弟子は、「まず一人でよく考え、信用できる同志をつくる、人柄と自分と共にやっていけるかが基準。人道的な思想を持つ人で中心メンバーを固める。非人道的問題を放っておけるかと大勢の声にする。緻密に考え、常軌を逸するほどに熱中する」「女性運動家+国会議員+有権者の立場を使い分けながら先頭に立ち、女性団体・市民団体と協力して運動を展開する」と語っている。こういう市川の方法を活かしたい。

IX. 聞き取りで時代背景を正確に知る

私たちが知らず知らず持ってしまう先入観や戦後的感じ方考え方を、聞き取りの中でただすことができる。文献資料に寄り掛からず、市川に関心が弱い問題も聞き取りで一歩踏み込んだ市川像を構成できるのではないだろうか。

2013年度 オーラル・ヒストリー総合研究会の動き

第11回総会	2013.4.20(土) 13:00~13:20	文京シビックセンター	参加19人
第26回例会	2013.4.20(土) 13:30~16:30	文京シビックセンター	参加19人
	「3.11の衝撃 いのちと暮らしを問い直す—東北の近現代史と聞き取りから」 講師 大門正克さん		
第51回世話人会	2013.5.14(火) 13:30~17:00	東京ボランティアセンター	世話人5人
	27回例会、28回例会、10周年記念誌、ニュース24号発行		
第52回世話人会	2013.8.9(金) 10:30~12:30	東京ウイメンズプラザ	世話人5人
	27回例会、28回例会、会費納入状況・退会のきまり確認		
第27回例会	2013.9.8(日) 13:30~16:30	東京ウイメンズプラザ	参加25人
	「亡くなった人と共生する聞き取り—市川房枝を軸に」 講師 伊藤康子さん		
第53回世話人会	2013.12.10(火) 13:30~16:30	東京ボランティアセンター	世話人5人
	10周年記念誌、28回例会、ニュース25号		
第54回世話人会	2014.2.4(火) 13:30~17:00	東京ボランティアセンター	世話人4人
	28回例会、10周年記念誌、ニュース25号、12回総会		
第55回世話人会	2014.3.18(火) 10:00~12:00	東京ボランティアセンター	世話人5人
	12回総会、28回例会、10周年記念誌、ニュース25号発行		
	*東京ボランティアセンターの正式名称は東京ボランティア・市民活動センターです。		

地域女性史研究会 スタート! 2014年3月9日東京ウイメンズプラザで発会式

全国から54人の方々が参加して、地域女性史研究会が発足しました。現在加入者は103人。総会では、会の趣旨、会則などが検討・承認され、初代代表に折井美耶子さんが就任しました。

記念講演は永原和子さんによる「地域に根ざし、地域を超える—地域女性史研究会の発足によせて」。会場からは「多くの人の拠り所となる研究会に」「全国的ネットワークを」「書き直し(史)の場として発信を」と、熱い期待が寄せられました。研究会の開催による会員相互の討論や共同研究、会報の発行などを予定しています。みなさまのご加入をお待ちしております。

オーラル・ヒストリー・ワークショップ ニュース No25 2014.3.18

会員募集中!

連絡先 〒120-0025 東京都足立区千住東2-6-2

年会費 1000円

宮崎黎子 Tel/Fax 03-3882-8576

e-mail: miyazaki.reiko@beige.plala.or.jp

*会費未納の方、ご入金よろしく

振替 加入者名:オーラル・ヒストリー総合研究会

お願いいたします。

口座No:00170-6-296964

おわりに

これからの10年に期待をこめて

宮崎 黎子

10年ひと昔という言葉があります。10年という歳月は決して短くはないはずですが、けれども実感としてはあっという間の10年でした。

オーラル・ヒストリー総合研究会が発足して、10周年という節目が射程に入ったとき、これまで発行してきた、会報『Oral History Workshop News』を合本して、残そうということになりました。ちなみに会報名が英語表記なのは、この研究会発足に際して大いに励ましてくださったポール・トンプソンさんにも通じるようにというのがそもその理由です。

会報は年に数回開催される例会（講演会・学習会）の案内と、その内容の要約を掲載するのが、主な目的でしたが、「私の1冊」というシリーズでは、会員のリレー方式で、オーラル・ヒストリーを中心に、心に残った1冊を取り上げました。たのしみな読み物として今も好評連載中です。

この研究会は、会則も数行というところにそのありようが象徴的に表われていますが、自由な語り合いと研究の場として、ここまで来ました。このような研究会が、10年歩み続け、これからも歩いて行くということは、大変なことなのだ、とはある会員の述懐です。確かに、そこに集う人々の思いがなかったら、ここまで続いては来なかったと思います。

当初、この記念誌の計画は会報のバックナンバーの合本というシンプルなものでしたが、次第にそれだけでは、もったいない、会員たちの思いも寄稿してもらおうということになりました。そうして寄せられた原稿のなかで、それぞれの出発点や今にいたる道のり、そして、現在が語られ、さらに未来への夢と希望が静かに、しかし熱く語られています。

表紙デザインは2010年に開催された「第11回全国女性史研究交流のつどい in 東京」の資料集・報告集のデザインを担当された小沼稜子さんをお願いしました。また、カットは元・八王子の婦人センター館長、中橋美奈子さん（90歳）の書かれたものを使用させていただきました。

現在の世の中の動きは、戦前の日本が戦争への道へ進んで行った過程をなぞっているかのように、本や映画のなかの戦争の姿が現実のものになりつつあるのではないかと思われ、恐れと虚しさを感じることがあります。

しかし、次世代に平和な社会を受け渡すためにも、地道に、こつこつと歩いていくことの大切さを改めて思います。これからの10年をどう拓いて行くか期待しつつ、学び続けていきたいと強く願っています。

編集委員

折井美耶子 武田 陽子 戸川トモ子
宮崎 黎子 山辺恵巳子 山村 淑子



表紙デザイン 小沼 稜子
カット 中橋美奈子

歴史と自己の再発見 オーラル・ヒストリー総合研究会 10年の記録

発行日 2014年7月13日 頒価 1000円
発行者 オーラル・ヒストリー総合研究会
連絡先 〒120-0025 東京都足立区千住東2-6-2
宮崎黎子 e-mail: miyazaki.reiko@beige.plala.or.jp
振替 加入者名: オーラル・ヒストリー総合研究会
口座No. : 00170-6-296964
印刷・製本所 盛岡タイムス社
〒020-0015 岩手県盛岡市本町通3-9-33